

A-7 アラビア語チュニス方言のVS構文による語りの構造化

熊切 拓

cyberbbn@gmail.com

要旨

本発表は、北アフリカのチュニジアの首都チュニスで話されているアラビア語チュニス方言の、主語 (S) が動詞 (V) の後に現れるVS構文を取り上げた。まず、先行研究を概観した後、物語テキストを対象にこの構文がどのような機能をもつか分析し、VS構文は無生物が主語の場合と、有生物が主語の場合では機能が異なることを明らかにした。無生物主語のVS構文は、単なる出来事を述べたり、背景の設定という機能を持つ。これに対し、有生物主語のVS構文は、出来事を述べるのに加えて、主語であらわされた登場人物を前景化し、場面を転換する機能を持つ。場面転換とは、聞き手に伝わるように語りを区切り、構造化することである。したがって、有生物主語のVS構文には語りの構造化という機能もあると考えられる。

1. 本発表の概略

本発表はアラビア語チュニス方言の主語 (S) が動詞 (V) の後に現れるVS構文を取り上げ、物語テキストを対象に分析を行い、有生物主語のVS構文が、登場人物の前景化と場面転換という語りを構造化する機能を持つと主張する。

2. アラビア語チュニス方言の概略

アラビア語チュニス方言 (以下チュニス方言) は、アラビア語 (古典アラビア語と現代標準アラビア語) の現代アラビア語諸方言のひとつであり、チュニジア共和国の首都チュニスを中心に広く用いられている。

29種の子音 (b, m, f, θ, ð, ðʕ, t, tʕ, d, n, s, sʕ, z, r, rʕ, l, lʕ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, h, ʕ, h, w, j/, IPAに準ずる) と、長短合わせて6種の母音 (i, a, u, i:, a:, u:/) を持つ。

名詞のクラスは男性 (M) ・女性 (F) に分かれ、単数 (SG) と複数 (PL) の区別がある。

動詞には完了形 (PERF) と未完了形 (IMPF) の2つの活用系列があり、人称・数・性によって活用する。なお、グロスでは以下の略号も用いる。AP: 能動分詞、DEF: 定冠詞、NEG: 否定、PP: 受動分詞、-: 形態素境界

3. 本発表の資料

本発表の資料として、チュニス方言で書かれた『アルアルウィー物語集』 (Al-ʕArwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z (1989) *hika:jat al-ʕArwi: Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Naʕir*) を利用した。本書は、チュニジアの伝統的な物語を著者がラジオ番組で語ったものに由来する。本発表で主として扱う物語は、第1巻の最初の物語

にして全4巻中最長の物語である「ランプよ、ランプ (mnajira ja:-mnajira)」である (p9-66、なお、p67-92はアラビア語による語釈)。引用にさいしては、訳文末の[]内にアラビア数字でページ番号を記した。

4. チュニス方言の動詞文

チュニス方言の動詞文は、VS構文、SV構文、V構文の3種に分かれる。このうち、VS構文は、この言語の基本語順である。SV構文は、主語が主題化された主題文である(熊切 2018)。動詞は主語と人称・性・数において一致し、そのため、主語がない場合も多い。これがV構文である。

次に、これらの3つの構文が「ランプよ、ランプ」でどのような比率で現れているかをみる。一文をどう定義するかによっても変りうるが、主文の述語を基準に数えると、この物語は約1,800の文からなり、そのうち、約1,400が動詞文である。このうち、V構文がもっとも多く、約1,100、VS構文とSV構文はそれぞれ約150程度であった。

したがって、V構文がもっとも無標の動詞構文であり、VS構文、SV構文はなんらかの機能をもつ有標の構文であるといえる。

5. VS構文に関する先行研究

アラビア語(古典アラビア語と現代標準アラビア語)におけるVS構文とSV構文の違いについては、出来事叙述(event-oriented)のVSに対して属性叙述(entity-oriented)のSVとする研究(Holes 1995: 208-209)や、前景叙述(foreground discourse)のVSに対して背景叙述(background discourse)のSVとする研究(Dahlgren 2009: 728)がある。

チュニス方言のVS構文の機能について論じた研究はないようだが、発表者はVS構文についてこれが出来事をそのまま述べる現象文であるとすでに論じている(熊切 2019a)。

その意味では、VS構文を出来事叙述とする先行研究と重なるが、文脈においてどのような機能を持つかについてはまだ十分に記述されてはいない。また、チュニス方言においてはSV構文もまた出来事を述べる場合がある(熊切 2019b)。それゆえ、SV構文との関係を考える上でも、まずVS構文の出来事叙述の性質を明らかにする必要がある。

6. 語りにおけるVS構文の機能

物語「ランプよ、ランプ」に現れたVS構文は154例であった。本発表は語りにおけるVS構文の機能を考察するものであるから、会話内に現れたVS構文はひとまず排除することとする。さらに従属節内のVS構文なども除くと、117例が残った。

これらの117例を調べると、動詞のほとんどが自動詞であったが、主語が有生物か、無生物かの場合でほぼ半分に別れた(それぞれ59例と58例)。どちらのVS構文も出来事を述べるものの、有生物のVS構文が場面転換の機能をも持つことが多いのに対して、無生物のVS構文はそうではないということがわかった。

まず、無生物の主語の場合をみる。この場合、VS構文は単発の出来事をあらわす。なお、以下の例文においてはVS構文を太字で示し、その日本語訳においては、VS構文は文頭の太字の[VS]、V構文は明示され

ない主語を [V 主語は] と記すことで示した。

- (1) farbit hatta: rwa:t w-3ra: ha:k-il-ma:
 飲むPERF.3SG.F ～まで 渴きがいやされるPERF.3SG.F そして-流れるPERF.3SG.M あの-DEF-水
- fi:-ʃru:q-ha:** w-tfarhdit w-raqʃit fi:-ha:
 ～の中-血管-彼女の そして-リラックスするPERF.3SG.F そして-戻るPERF.3SG.F ～の中に-彼女
- r-ru:h** tfakkrit hmu:m-ha:
 DEF-魂F 思い出すPERF.3SG.F 悩み-彼女の

「(娘が砂漠をさまよひ、ようやく水たまりを見つける) [V 彼女は] 飲んだ。ついに [V 彼女は] 渴きがいやされた。そして、[VS] その水が彼女の血管を流れた。そして [V 彼女は] リラックスした。[VS] 魂が彼女の中に戻った。[V 彼女は] 自分の苦境を思い出した。」 [29]

無生物主語のVS構文は、背景の設定にも用いられる。この場合、しばしば受動動詞が現れる。以下の例は「ランプよ、ランプ」ではない物語からの引用である。2人の登場人物(黒い商人と客)の会話が始まる前段階をなす部分であり、その会話がなされる背景が2つのVS受動構文によって設定されている。

- (2) hazz-u: l-id-da:rʃ ɔʃajf-u: ɔʃa:fa mta:ʃ-mlu:k
 連れて行くPERF.3SG.M-彼を ～に-DEF-家 もてなすPERF.3SG.M-彼を もてなし ～の-王PL
- thazzit** itʃ-tʃa:wla thatʃʃ it-ta:j ʃarbu:
 置かれるPERF.3SG.F DEF-テーブルF 置かれるPERF.3SG.M DEF-お茶 飲むPERF.3PL
- tnahnhu: qa:l-lu:
 くつろぐPERF.3PL 言うPERF.3SG.M-彼に

「[V 彼=黒い商人は] 彼を家に連れて行った。王たちのもてなしで [V 黒い商人は] 彼をもてなした。[VS] テーブルが置かれた。[VS] お茶が置かれた。[V 黒い商人と客は] 飲んだ。[V 黒い商人と客は] くつろいだ。[V 黒い商人] は彼に言った。」 [114]

出来事の生じる時間を指定するVS構文も多いが、これもやはり背景の設定といえる。

- (3) qa:l mli:h ajja: tʃa:h l-li:l rawwiḥ
 言うPERF.3SG.M よい さて 落ちるPERF.3SG.M DEF-夜 帰るPERF.3SG.M
- 「[V 彼は] 言った。「よろしい」 さて [VS] 夜が来た。[V 彼は] 帰った」 [55]

なお、VS構文は完了形が多いが、反復する事態を述べるときは未完了形となる。これは場面転換のVS構文でも同様である。

- (4) tʒu:ʃ tiʒbid kaʃka ta:kil-ha:
 空腹になるIMPF.3SG.F 取り出すIMPF.3SG.F 菓子 食べるIMPF.3SG.F-それを
- ʃi:ḥ** l-li:l tiʒbid tʃarʃ bsi:sa
 落ちるIMPF.3SG.M DEF-夜 取り出すIMPF.3SG.F 少量 (食べ物の名)

「(娘は旅に出る) [V彼女]は空腹になると、[V彼女は]お菓子をとり出して、[V彼女は]それを食べ、[VS]夜が来ると、[V彼女は]ブシーサの粉を少し取り出す」[28-29]

次に有生物が主語の場合のVS構文をみる。このVS構文は、通常、物語において新しい場面を導入するときに用いられる。次の(5)の例のように、時を指定するVS構文が先行したり、時の副詞を伴うことも多い。

(5) w-mʃa:t qaʃdit tʃa:h l-li:l ʒa: rʃ-rʃa:ʒil
 そして-行く PERF.3SG.F 座る PERF.3SG.F 落ちる PERF.3SG.M DEF-夜 来る PERF.3SG.M DEF-男
 ʃa:f ha:k-il-qaðʃja mahtʃu:ʃa ki:ma: ʒa:b-ha:
 見る PERF.3SG.M あの-DEF-買い物 置く PPSG.F ~のように 持ってくる PERF.3SG.M-それを
 qlib in-nʃa:l xraʒ
 ひっくり返す PERF.3SG.M DEF-履物 出る PERF.3SG.M

「(男の家にやってきた娘の行動について語り) [V娘は]行った。[V娘は]座った(=何もしなかった)。[VS]夜がきた。[VS]男がやってきた。[V彼は]自分ももってきたままにあの買い物が(手付かずに)置かれているのを見た。[V彼は]履物の向きを変えた(=踵を返した)。[V彼は]出ていった」[12]

ここで(3)との違いをみると、(3)においては単に背景が「夜」に設定されただけで、その前後では同じ登場人物「彼」を主格とするV構文が現れている。これに対し、(5)においては、背景が「夜」に設定されただけでなく、続くVS構文によって、動詞の主語が「娘」から「男」へと切り替えられている。すなわち、VS構文によって物語のある場面の中心となる登場人物の切り替えが行われたといえる。

また、単に主語が変わっただけではなく、(5)の「男」を主語とするVS構文の後には、この主語に一致するV構文が連続している。すなわち、有生物主語のVS構文は、登場人物の切り替えと、その人物が続く場面において中心となることをあらわしている。いかえれば、VS構文により登場人物が前景化されたということになる。次の例は、VS構文による登場人物の前景化とその切り替えが観察できる典型例である。

(6) dxal l-aʃru:s la: kla:m la: sla:m sʃalla: rukʃti:n
 入る PERF.3SG.M DEF-花婿 NEG 言葉 NEG 挨拶 礼拝する PERF.3SG.M 2回
 w-ʒa: ʃa-l-bank w-tmadd rqað
 そして-来る PERF.3SG.M ~の上-DEF-長椅子 そして-横になる PERF.3SG.M 寝る PERF.3SG.M
 nahha:t hi:ʒa hwa:ʒ-ha: w-tʃalʃit raqdit fi-l-faʃf
 脱ぐ PERF.3SG.F 彼女 着物-彼女の そして-上がる PERF.3SG.F 寝る PERF.3SG.F の中-DEF-ベッド

「(娘が男の家で待っていると) [VS]花婿(=男)がひと言も言わず入ってきた。[V彼は]2回礼拝をした。そして[V彼は]長椅子に上がった。[V彼は]横になった。[V彼は]寝た。[VS]彼女(=娘)が着物を脱いだ。そして[V彼女は]ベッドに上がった。[V彼女は]寝た。」[11]

ただし、有生物主語のVS構文が常に前景化にかかわるわけではない。有生物でも物語上重要な役割を果たしていないときは、無生物主語のVS構文と同じように出来事や背景を述べるものとなる。

(7) **daxlu:** **ʒ-ʒma:ʃa** **w-bu:ʃatʃu:f** **qa:m** **z-zya:rit**
 入るPERF.3PL DEF-全員 そして-お付きの人々 起るPERF.3SG.M DEF-女性の喜びの叫び

「[VS] お付きの人々もろとも全員が (城に) 入った。[VS] 女性たちの喜びの叫びが起きた。」 [65]

また、本発表では省略するが、「声」や「馬車」といった無生物でも、その声が何かを語る、あるいはその馬車に登場人物が乗っていることが前提とされている場合は有生物主語のVS構文に近いものとなる。

こうした例外はあるにせよ、有生物主語のVS構文は、その主語が主要登場人物である場合には、登場人物の前景化と場面転換が生じる。

7. VS構文による語りの構造化

有生物主語のVS構文は、登場人物の前景化と場面転換をもたらすが、これは逆にいえば、この構文がそうした転換の標識となっていることでもある。実際、『アルアルウィー物語集』においては、しばしば有生物主語のVS構文によって新たな段落が開始される。

このように語りを区切るということは、聞き手に伝わるように語りを構造化することである。すなわち、有生物主語のVS構文には語りの構造化という機能を持つと考えられる。

そこで、物語「ランプよ、ランプ」のはじめの部分 (9-18) の物語の流れにおいて、有生物主語のVS構文が語りをどのように構造化しているかを見る。なお、「ランプよ、ランプ」は、3人の娘が冒険の末にそれぞれの運命の夫と出会うという物語である。ここに取り上げるのは最初の娘 (三女) が主役となる部分の前半であり、登場人物は女、長女、次女、三女、男である (ただし、物語では長女と次女は区別されてはいないが、便宜的に区別する)。

以下の物語のまとめにおいては日本語訳のみを示すが、「 」内の文が有生物主語のVS構文の訳、それに続く () が、次の有生物主語のVS構文までの物語の要約である。

(夫を亡くした貧しい女がいた。女には3人の娘がいた。)

① 「女は娘とともに羊毛紡ぎの仕事をしている。(動詞は未完了形)」

(羊毛を仕入れて紡いでは市場で売る、そういう暮らしぶりだった。)

② 「ある日のこと、彼女 (=女) の前で男が足を止めた。」

(男は羊毛の出来に感心し、女に長女との結婚を求める。女は長女の婚礼の準備をする。)

③ 「夕暮れに家の前に馬車が止まる。花嫁 (=長女) は準備ができた」

(長女は馬車に乗り込み、立派な家に連れて行かれる。)

④ 「(例文(6)) 花婿 (=男) がひと言も言わず入ってきた。」

(男は長女に触れもせず、長椅子で寝てしまう。)

⑤ 「(例文(6)) 彼女 (=長女) が着物を脱いだ。」

(長女は寝る。翌朝男は起き出して買い物籠を運んでくる。)

⑥ 「彼女 (=長女) が目を覚ました。」

(長女は買い物籠を見つけるが、料理道具がないので何もしない。)

⑦「(例文(5)) 夜がきた。男がやってきた。」

(男は長女が何もしていないのを見る。次の日も次の日も同じことが続き、3日目の夜、男は長女を離縁して女のところに帰す。しばらくして、男は再び女の前に姿を現し、次女に求婚する。次女は男の家に連れて行かれるが、やがて長女と同じように実家に帰される。三女はこの男の行為に怒る。男が求婚に来ると、真相を知るために家に行き、同じことが起きる。男が朝、買い物籠いっぱいの食料を持ってきて姿を消す。三女は、隠された台所を発見し、料理を作る。)

⑧「夜が来た。花婿(=男)がやってきた。」

(男は料理が出来ているのを見て三女を妻とする。)

⑨「翌日、母親(=女)がやってきた。」

(女は三女の幸せな様子を見る。)

⑩「母親(=女)が家に帰った。」

(女は長女と次女に三女の幸福な様子を伝える。)

⑪「2人の娘(=長女と次女)は嫉妬した。」

(長女と次女は、三女に意地悪を言う。)

⑫「もう一人の女(=女)は行く。(動詞は未完了形)」

(女は三女に姉たちの言葉を伝える。)

⑬「三女は激怒した。」

⑭「夜が来た。花婿(=男)がやってきた。」

(三女の冷たい様子を見る。ランプに話しかけて、その原因を知る。三女に解決を約束する。翌朝、娘に贈り物が届く。)

⑮「母親(=女)がやってきた。」

(女は三女の幸せそうな様子を見て帰り、長女と次女の嫉妬を掻き立てる。)

⑯「その晩、男がやってきた。」

(男は三女と宴を始め、大いに楽しむ。いっぽう、2人の娘は、意地悪な計画を立てる。女は三女に伝える。)

⑰「その晩、男がやってきた。」

(三女の冷たい様子を見る。ランプに話しかけて、その原因を知る。三女に解決を約束する。)

ここに見られる17の有生物主語のVS構文の多くが za: 《やって来る》、mfa: 《行く》、dxal 《入る》、wquf 《止まる》、rawwih 《帰る》という移動に関係する動詞である(①、③、⑤、⑥、⑪、⑬以外)。これは、登場人物の移動によって場面転換が行われ、物語が展開しているためであると考えられる。

しかし、有生物主語のVS構文のみが、物語の展開を引き起こすのではないことも、上記を見れば明らかである。特に、⑦と⑧の間は、主人公である三女の登場とその活躍という重要な部分を含んでいるが、ここには場面転換のVS構文は現れない。また、逆に⑬のように、VS構文の後に特に展開もなく次のVS構文(⑭)が来る場合もある。

そうではあっても、ここに見たように全体としては、有生物主語のVS構文は、登場人物の前景化と場面転換により物語を展開させる機能を持っているといえよう。

8. 結論と課題

本発表では、物語におけるVS構文の機能を調べ、無生物主語の場合は出来事を述べるが、有生物主語の場合は単に出来事を述べるだけでなく、登場人物の前景化と場面転換により、語りを構造化する機能を持つと論じた。

この有生物主語のVS構文は、すべての場合に当てはまるわけではないものの、「さて、～は～しました」と、話題転換の「さて」とともに日本語に訳せる。これも、この構文の持つこうした機能によるものであろう。

場面転換は、実際に語ることでこれを行うこともできる（例えば「ここで男のほうに話題を移しますと……」）。こうした場面転換に比べると、本発表で扱ったVS構文による場面転換は「弱い」ものではないかと考えられる。また、VS構文以外にも、例えば(3)の *ajja*: 《さて》のような談話標識などによる場面転換もある。これらの場面転換がどのように異なり、語りにおいてどのような機能を果たしているかについては、今後の課題としたい。

参考文献

Dahlgren, Sven-Olof (2009) “Word Order.” *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, Vol. IV*. ed. Kees Versteegh et al. 725-736. Leiden/Boston: Brill.

Holes, Clive (1995) *Modern Arabic, Structures, functions and Varieties*. London/New York: Longman.

熊切拓 (2018) 「アラビア語チュニス方言における主題化」 『東京大学言語学論集』 40. 119-133.

熊切拓 (2019a) 「アラビア語チュニス方言の受動構文の意味」 『日本言語学会第158回大会予稿集』 218-224.

日本語学会

熊切拓 (2019b) 「アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの」 『東京大学言語学論集』 41. 155-179.